



翌朝、少し早めに目覚めた俺は、寮の食堂で朝飯を食い、それからジョージに連絡を入れてみた。呼び出しにはすぐ出たジョージだったが、どうやら完徹らしく、さすがに眠そうな声。もう少しらしい。今最後のチェックを入れているところだそう。なんとか間に合いそうだと言うので、後は北学生寮の連中に任せて、登校の支度をする。

寮から出たところで美月が待っていた。

「おはよう。早いな」

「ずいぶんのんびりしてるじゃない。待ちくたびれたわよ」

いや、待っていてくれと頼んだつもりもないのだが、それを言うと朝から騒ぎになるのでやめておこう。

「いや、ちょっとジョージに連絡入れてたからな」

「で、どうなの？」

「ああ、なんとか間に合いそう。あとはケイたちが首に縄かけてでも引つ張ってきてくれるだろう」

「結局、徹夜でやってたわけ？ ジョージは」

「ああ、そうみたいだな。かなり眠そうだったよ」

「宿題はいいとして、実習は大丈夫よね」

「たぶん・・・」

「実機でエンジニアリングが居眠りしたら洒落になんないわよ」

「そうだな。なんとかもうひと頑張りしてもらおう」

俺たちは、寮の前で車を拾うと、訓練施設に向かった。訓練施設はゾーンの中央部分にある。ここから地下に向かうシャフトを降りると格納庫だ。ステーション内部の三角柱の内側は円筒形の空洞になっていて、そこに宇宙港や訓練用のベイが作られている。練習機の離着陸デッキは、宇宙港とは少し離れた場所に、一般の航路と干渉しないような形で作られている。

直径が4 Km、長さが20 Kmもある大きな空洞だが、宇宙艇の速度なら一瞬だ。ちよつとしたミスが重大事故に繋がるため、どの船も離着陸はステーション管制による自動制御が義務づけられている。訓練ではマニュアル離着陸も行うが、それはステーションの周辺に作られている訓練用浮遊デッキを使って行うことになっている。

小型艇中心のアカデミー訓練機用デッキは、ステーションの内壁から突き出した構造になっていて、アカデミーの施設は格納庫エリアを含む大きなビルくらいの構造物の中に収容されている。中央の格納庫エリアから両側に離陸用カタパルトを含む離着陸デッキが複数突き出している。宇宙艇は格納庫からこの離着陸デッキに移動し、カタパルトで射出される。

一方、大型艦は、専用の埠頭が用意されていて、そこに直接係留されている。一般の宇宙港やスペースガードの巡航艦基地などは、この形だ。宇宙港などの共用施設はタイムゾーンに係なく24時間運用されている。場所によっては地上を移動するのに時間がかかるため、ステーション内部には、施設間を移動するためのシャトルシステムが用意されていて、地域ごとのシャトルステーションから各施設へ移動できる。実習も、自分のゾーンの施設以外で行う場合は、このシャトルを使って、他ゾーンや周辺軌道の訓練施設に行くことになる。

格納庫に降りると、集合場所がある。うちのチームはまだ俺たちだけだ。

「まだみたいね。大丈夫かしら」

「だと思っただけだな。ちよつと連絡を入れてみるか」

俺がコミュニケーターを取り出してジョージを呼び出そうとした時だった。

「おい、おはよー」

「ケンジ君、美月さん、おはようございます」

「おはようございます」

「……」

北学生寮組4人が到着。よかった。しかし、ジョージはかなりまいっている感じだ。

「おはよう。ジョージ、大丈夫か？」

「なんとか、生きてるよ」

「もう、連れてくるのが大変だったよ。出がけに呼んだら返事が無いから、寮監さんにたのんで見てもらったら、机で寝てたみたい。ようやく連れ出したと思ったら、車の中でも爆睡してたし……」

「そりや大変だったな。完徹じゃ無理も無いか。でも間に合ってたよ」

「寝たい、もう寝たい……」

ジョージがつぶやく。本当に眠そうだが、これからは本番だから、なんとか頑張ってもらわないといけない。

「ジョージ君、コーヒー飲みますか？」

マリナがコーヒーを買ってきた。やはり彼女は気がきく。

「ありがとう。いただくよ」

ジョージは一気にブラックコーヒーを飲み干す。

「はあ、ちよつと目が覚めたかな。でも、さすがにキツかったよ、一晩でこいつを仕上げるのは」

ジョージは持ってきた小箱を見せて言う。これは昨日、フランクから貰ってきたあの箱である。

「ところで、何なんだ、それ。そろそろ教えてくれないんじゃないか？」

「ああ、もうちよつとだけ待ってくれよ。きちんと動くのを確認したら教えるからさ。ちよつと先に先生のところへ行ってくるから、時間になったら205号艇で会おう」

ジョージは、箱をかかえて、教務室の方へ歩いて行く。まだ少し時間があるので、俺たちも購買で飲み物などを買って開始時刻を待つ。しかし、昨日の午後のことを考えるとちよつと憂鬱だ。

「あー、憂鬱よね。今日もあのオンボロを飛ばさなきゃいけないなんて」

美月も同じことを考えてるようだが、口に出してみても始まるまい。

「最初に最新型に乗っちゃったからねえ、余計にボロい感じがするよね」

「もう少し処理能力が欲しい」

「そうですね、私のところは、まだマシですけど、メデイカルデータベースの検索には時間がかかりますね」

「まあ、欲を言ってもしかたがない。なんとか頑張ろうぜ」

「そだね、ここはひとつリーダーのケンジに代表して頑張ってもらおう」

「そうよね、ケンジが責任取るべきね」

「お、おい！」

そもそも何の責任だ？ 練習機がボロな責任を俺が取るのか？ そりゃ理不尽過ぎるだろう。

「よし、全員集まってるな。各自、訓練の準備にかかれ。もたもたしてると置いていくぞ！」

いつものコワモテの声が響く。学生たちは格納庫に入って、それぞれに機体に散っていく。俺たちも、205と書かれた機体の前までやってきた。そこにはジョージと、それからフランクがいる。

「おはよう。みんな調子はどうだ？」

「はあ、もう最悪ですよ。ST2Aとは違いすぎて・・・」

「まあ、そうだろうな。いきなり、あれに乗せてしまったのは私のせいだから、少しは責任を感じてるんだがな。ということで、今日は私が君らの担当だ。よろしくな」

「はあ、よろしくお願いします」

しかし、フランクが指導教官でも状況がそう変わるとは思えないのだが。

「さて、準備にかかろう。そのまえに、エイブラムス、そいつを取り付けてくれ」

「わかりました。でも、いきなりやるんですか？」

「そうだ。自信が無いのか？」

「いえ、そういうことでは・・・」

「だったら急げ！」

どうやら、例の箱の出番らしい。いったいなんなんだろう。ジョージが箱をあけて、中から金色のユニットを2個取りだした。

「メインコンピュータか？それ」

「そうだよ。特別製のね」

ジョージは機体のサイドパネルを開くと、その中にもぐり込んで、そこに入っているコンピュータユニットを手際よく取り外し、持ってきたユニットと交換する。機体の両側に一個ずつ。宇宙艇のコンピュータは少なくとも二重化されている。もっと大型の宇宙船の場合、さらに冗長度が高い。

それからジョージは脇にある操作パネルを操作してそれを起動する。ユニットが薄い光を発生し始めた。量子演算ユニットが動き始めたのだ。

「よし、なんとか繋がった」

ジョージはそう言うのとサイドパネルを閉じて、俺たちの所に戻ってきた。

「交換しました。とりあえず接続は正常です」

「よし、それじゃ全員搭乗して準備にかかってくれ」

「はい」

俺たちは205号艇に乗り込むと、それぞれの席についた。

「システム起動します。自動チェックシーケンス開始」

ジョージがコールする。エンジニアリング席のモニターパネルに情報が表示されはじめる。

「自動チェック完了、メインシステム異常なし。」

さてよ、チェックシーケンスの完了が早くないか。本当にきちんとチェックできてるのか？

「よし、中井。各部のチェックを初めてくれ」

「了解しました。機長席システム接続、システムチェック。操縦系統正常。え・・・？」

ちよつと待て、なんでチェックがこんなに速い。昨日はこの数倍の時間がかかってたはずだが・・・。

「副操縦士席、システム接続。操縦系統、火器管制システムチェック。すべて正常。なに、これ？」

「ナビゲーションシステム接続チェック、・・・異常なし。ちよつとこれ速くない？」

「C&I席接続確認、通信系、各種センサー異常なし。処理速度がぜんぜん違う」

「メデイカルコンソール接続確認、VMIアクセス許可確認。すべて正常。反応が・・・」

どうやら、全システムがやたらと速くなっているようだ。理由はさつきジョージが取り付け

たコンピュータユニットにあるらしい。どんな手品だ、これは。

「全システム正常動作を確認。はあ、よかった。なんとかうまく動いてるみたいだ」

「ジョージ、これはいったいどういうことなんだ？」

「あはは、これは私から実験に協力してくれた君たちへのささやかなプレゼントだ。エイブラムス、説明してやれ」

フランクが笑ってそう言うと、ジョージが説明を始めた。

「さつき、取り付けたコンピュータユニットは、実はこの機種のものじゃないんだ。2Aシリーズ用の最新型さ。ハードウェアシステムのインターフェイスは共通なので、物理的には取り付けられるんだ。でも、ソフトウェアは、この機種のもを移植する必要がある。僕が徹夜でやっていたのはその作業さ。今、少なくとも情報処理系だけとってみれば、この船の能力はST2A並になってるんだ」

「だから、処理がこんなに速いのか？」

「そう。でも、処理系を換えただけだから、エンジンや操縦系統、そのほかのハードウェアの能力はそのままでもどおり。それを越える操作はできないようになってるから、2Aシリーズにはまだまだ及ばないけどね」

「いや、十分だよ、これで俺たちもともに訓練ができる」

「でも、いつまでも特別製ってわけにはいかないよね」

たしかにケイが言うとおりで。今使っているコンピュータユニットをずっと持ち歩くわけにはいくまい。故障でもしたらアウトだし。

「それは、心配なくていい。今、アカデミーやスペースガードで1Bシリーズのコンピュータを最新型に換える計画があつてな。いずれは、全部の船がこのコンピュータを搭載することになるはずだ。まあ、それまでは機体が変わるたびに、交換しないとけないが、それも長くはないだろう。今回は、エイブラムスにその実験にも協力してもらったわけだ」

とフランク。

「また実験台？」

美月がちよつと不満そうに言う。

「いいじゃないか。おかげで、最新型を使えるわけだし」

「そうだよ。とりあえず、何かあったらジョージが責任取ってくれるからさ」

「えー、そりゃ責任がないとは言わないけど、僕には取り切れないかも。てか、何かあったら全員、一連託生だしね」

「何かあったら、命がけ・・・」

「そうだ。船のメインコンピュータがバグったら、本当に命がけになるかもしれない。しかし、学生の訓練でそんな危険を冒していいのか？」

「念のために言っておくと、これを君たちの基礎訓練で最初に使うのはそういう意味もあるんだ。基礎訓練は、基本的にステーションの近くで行われるし、不慣れた訓練生であることを考慮して、レスキュー体制も完備してるからな。まあ、それでも事故が発生する可能性はゼロじゃないが、それは、従来型の機体でも同じことだ。だから安心していいぞ」

「なんとなく、うまくまるめこまれたような気がするのは俺だけだろうか。でもまあ、フランク自身が教官として同乗するのだから、彼も一連託生なわけだ。」

「よし、それじゃ続けよう。エイブラムス」

「了解。情報共有モードをテストしよう。各自、情報共有モードに切り替えてみてくれ」

「これまた昨日のことが嘘のようだ。コンピュータは大量の情報を何の問題も無くさばいている。ジョージのプログラムのおかげで、最新型機とほぼ同じ情報が整理された形で表示されてくる。」

「いいよ、これ！、ジョージ、ありがとうっ！」

とケイが叫ぶ。

「よし、それじゃ訓練を開始するぞ、準備はいいか？」

フランクはそう言うと、管制を呼び出して訓練開始を告げる。俺たちは、またお決まりの手順に従って、離着陸を繰り返すことになる。マニュアル操縦もまったく違う機体みたいにスムーズだ。あまりにスムーズすぎて少し拍子抜けしてしまう。しばらくは、この退屈な訓練が続

くのだが、これはしかたがない。思いがけないプレゼントに盛り上がった俺たちだったが、午前の訓練が終わる頃には、かなりテンションが下がってしまっていた。

◇

「あーあ、ちよつと退屈かもー。もうちよつと刺激が欲しいよー、リーダー」

昼飯を先に食い終わったケイが、テーブルに突っ伏してぼやく。

「しかたないだろ、基礎訓練なんだから。それに、実機訓練は退屈なくらいが一番だって。逆に何かあったら困るだろ？」

「ステーションの管制圏内ばかりじゃ、ナビの出る幕ないじゃん。座ってるだけじゃ、つまんないよ」

まあ、その気持ちはわからないでもない。でも、だからといって何か出来るわけでもない。しばらくは、我慢してもらおうしかないわけで・・・

「あんたね、文句言っただって仕方ないじゃない。そんなこと言ったらマリナなんかもつと退屈じゃないのさ」

美月が、口に運びかけたフォークを持ったまま、ちよつと不機嫌そうに言う。

「私は、大丈夫ですよ。それが仕事ですから。それに、皆さん、退屈しながら集中力が切れないところがすごいですよ」

「まあ、乗員には必要なことだしね。でも、それも、そろそろ限界なのよー。ずっと同じチャートばかり眺めてるとね」

マリナがいつものようにフォローするけど、ケイは本当にダルそうだ。パイロットやエンジンアリングは、繰り返しと言ってもそれなりに動きがあるし、変化もある。たしかに、ナビとメデイカルは辛そうだが。C&Iはどうだろう・・・

「チャートの表示範囲を広げて、周辺航路のトラフィックを見ていると飽きない」

サムが珍しく口をはさむ。そうか、彼女もセンサーの監視レンジを広げて退屈しのぎをしているのかもしれない。

「そっか、その手があったか。周辺航路の状況を見ておくのも私の仕事だしね。午後はそれでやってみよう。ありがとね、サム」

「それなら、広域監視用にくつか機能を追加してあるから、ちよつと使ってみてよ」

「えー、それ大丈夫なの？チャート全体がおかしくなったりしないよねえ」

「もう、信用ないな。まあ、ちよつと冒険なのはたしかだけど、そこまでひどくはないと思
うよ」

「大丈夫。いくつかは試して見た。よく出来てる」

「え、もう使っちゃったの？いつのまに？」

どうやら、サムはめざとくジョージが入れた機能を見つけて、既に試しているらしい。センサー系に関しては、C&Iはエンジンアリング以上に知識があるから、彼女のお墨付きがあれば大丈夫だろう。

「まいったな。でもまあ、説明する手間がはぶけたか。基本は、長距離センサー情報の処理変更なんだけどね。1Bシリーズのセンサーは2Aシリーズに比べて、性能はかなり落ちる。スキャンできる距離もそうだけど、決定的なのが解像度なんだ。ただ、解像度は、ソフトウェアの処理である程度改善できる。新しいコンピュータの演算能力を使えば、解像度を4倍くらいにすることができるんだ。2Aシリーズに近い解像度が得られる。あと、距離についてはどうしようもないんだけど、これは、航路局のデータを拝借して、スキャン範囲外の部分を擬似的に表示できるようにしてみた。少し、遅延が出るけど、距離は1.5倍くらいまで出せるよ」

「航路局って、もしかして、あたしのインターフェイスを使ってるわけ？」

美月が口をとんがらせてジョージにつつかかる。

「ごめん、先に言っておくべきだったよね。美月の持っている航路局直通回線のインターフェイスは使わせてもらってる。正確には一旦、ケンジとの間で情報共有されたものを使ってる。そうしないと、データの流量をうまく制御できないんだ」

「・・・ってことは、あたしとケンジの両方がいないとダメってことよね」

「正直言ううとそうなんだけどね。でも、これもいずれ、正式に実装される機能みたいだから、それまでの間・・・ってことで」

「ま、いいわ。で？ 他には何をしてるわけ？」

美月がさらに突っ込む。だが、それには俺も興味がある。ジョージのことだ、まだ他にも隠し球があるに違いない。

「まいったな。お見通しか……。宇宙局専用回線のインターフェイスで、いくつかの衛星システムを使わせてもらってる」

「衛星って、ナビゲーションとか宇宙風関連の情報なら、もともと宇宙艇の通信機能で受信できるだろ」

「いや、結構レア物の情報があるのさ。太陽系内にはいろんな衛星や人工惑星がいる。中にはちよつと面白いセンサーなんかを積んだやつもいるんだ。まあ、どこまで使えるかわかんないけど、とりあえず情報は取れるようにしておいた」

「ちよつと！ 使用料請求していいかしらね？」

「あはは、今度なにか奢るよ。それで勘弁してくれないかな」

「おいおい、いいのか、結構高く付くぞ」

「なによ、それどういう意味？、バカケンジ！」

「いや、そういう意味なんだけどな」

そもそも、この宇宙じゃ、こいつの口に合う食い物なんてないだろう。あるとしたら、地球直輸入物を売りにしてる高級レストランくらいだ。

「私も奢りたい。このデータは私にとってはとても貴重」

「そうだねえ、私もだいぶ助かるからなあ。それ乗るよ。もちろん乗るよねえ、リーダーも」

いきなり俺に振るなよ、ケイの奴……。そこまで甘やかすことないっての。

「何よ、なんか不満そうじゃない？ケンジ。何か文句でもあるの？」

「あ、いや、ありません。俺も、まあ、あれこれ助かってるし」

ああ、弱いなあ、俺って。でもまあ、こいつの雑多なインターフェイスが時々思わぬところで役立つのは事実だからな。まあ、皆がそういうなら乗ってもいいか。

「皆さん、それじゃ今度、お休みの日にお食事会しませんか。いいお店があるんですよ。もちろん美月さんの会費はなしで。私も参加しますから」

てな感じでマリナが最後にうまくまとめてくれる。こうやって、なし崩し的に次の休みの日

に食事会が決まったわけだ。

　昼食時間はこうして終わり、俺たちはまた退屈な訓練に戻ることになる。そう、それは退屈な時間のはずだったのだが……。